

川と池を掘るといった手を加えることで、植生やそこに生きる昆虫や動物の様子が変わっていくのを直接目にするのができたのは興味深い体験だった。これからも何か少しずつ変わっていくのだろうが、それをできる範囲で記録しておきたくなった。そのためにはベースになる現状の地図が必要になる。それもどこにどのような木が生えているのかなど細かな情報がのっている地図があると良い。当然、それは自分でつくらなければならない。

敷地のことでわかっているのは、土地を購入するときにもらった測量図で敷地の四辺の距離と、建築確認申請に記載した建物の位置と大きさだけである。そこから木の一本一本の位置を調べて地図に書き込んでいく必要がある。いったい敷地に何本の木があるものか検討もつかない。それでも、調べたいという気持ちはかなり強かった。自分の敷地にどのような木が生えているのかも知らないでいるのは、何か情けない気がした。木の種類が細かくわかっていると、またこの土地の見え方もきつと変わってくると思われた。

さて、どこから手をつけようか。まずは、地図を書き込むおおよそ畳半分の大さきの紙を用意し敷地の形と建物を描いてみた。次に、建物から近い比較的大きな木を目印として地図に落とすことにした。建物の端から木の方向と距離を測ってそれを地図に書き写すことを繰り返せば、いつかは地図が完成する。木の方向はスマホの方位磁石で北から何度と測ることができそうだ。問題は距離だ。ゴルフで使うデジタル機器でピンまでの距離とか障害になる木の高さなどが測れるものがありそれを使うことにした。ゴルフはまったくやらないのだが、仕事で建物の位置や高さを計る必要があったときに購入したものが役にたった。建物の両端から見える範囲の木を測ってはメモをして、それを地図に書き写す作業をしていたら、どうも実際の木の位置と地図上の木の位置が明らかに違うところがでてきた。方位磁石は水平に構えないと正確に方角を示さないの、で何度か同じ場所を計るとその都度ちよつとずつ違ってくる。これではだめだ。次に考えたのは、建物の両隅から木までの距離を測って、それを地図にコンパスで円で描くと、その二つの円が交わるところが木の位置になる。そうやって建物のまわりに目印になる木を増やしていけば、さらにその目印からの距離でその他の木の位置を地図に落とすことができる。これもやっているうちに変な場所に木があることになってきた。ゴルフ用のデジタル機器の精度に疑問を持ち同じ場所を何度も測ってみると都度、変な値が出てしまう。

ここはデジタルに頼らずアナログに行こうと決めて、伊能忠敬方式を試すことにした。伊能忠敬は距離を歩数で何歩あるかで測ったという。これなら怪しい道具を使わなくて良い。まず一步の歩幅を測って、そのあと十歩歩いて実際の距離を測ってみる。たったそれだけでもびったり同じ値はでない。伊能達は同じ歩幅で歩く練習を何度も何度もしたそうだが私にはできるとは思えない。いったいどうして伊能忠敬は、あんなに正確な日本地図をつくることのできたのか。ただただ敬服するだけだった。

